

## 自分自身や自分の生活とのかかわりでとらえる社会科授業の創造Ⅱ ～中心人物を結び付けた学習内容の構造～

枝 迫 大 明〔鹿児島大学教育学部附属小学校〕

### The study of social studies classes how to let pupils to understand the relationship between themselves and the society ～Structure of learning contents combined with key persons～

EDASAKO Hiroaki

キーワード：知識構造、中心人物の結び付き、社会的事象の関連付け、言語活動

#### 1 主題設定の理由

社会科の学習指導要領解説には、何を学習するのが明確に記述されている。教師として、記述されている内容を身に付けさせなければならないことは理解できる。しかし、それらの学習内容をどのように設定するかで苦しむ教師は多いのではないだろうか。問題解決的な学習の充実を図らなければならないことは知っている。しかし、学習過程をどのように設定し、身に付けさせなければならないことをどのように構造するかについて苦心する小学校教師は多いはずである。

そこで、社会科で学ぶべき学習内容をどのように構造して、調べて考えさせることが、自分の生活とのかかわりで見たり考えたりすることになるのかを探ることとする。

#### 2 検討した年中行事について

##### (1) 取り上げた年中行事

子どもたちの住む鹿児島市で行われる主な年中行事は以下の通りである。

曾我どの傘焼き、赤穂義臣伝輪読会、妙円寺詣り、おぎおんさあ（祇園祭り）、六月灯

次の視点から、年中行事を吟味した。

- ① 子どもたちの興味や関心を引きつける素材があるか。
- ② 小学3年生が見たり聞いたりしたことがあるか。
- ③ 生活の安定や向上に対する人々の願いや保存・継承するための工夫や努力を考えるための素材があるか。
- ④ 謂われや由来、続けられる理由について十分な根拠があるか。

①から④の視点から吟味し、第3学年単元「わたしたちの市にのこる昔」において「おぎおんさあ」を取り上げることとした。

(2) 「おぎおんさあ」を取り上げるよき

##### ①の視点から

おぎおんさあは神幸行列であり、その中で最も目を引くのは八坂神社から担ぎ出される御輿である。御輿の数は年によって違いがあるが、一番大きな御輿は一番御輿と呼ばれ、重さは1tある。その御輿を、夏の最高気温35度にもなる時期に、人の力だけで5時間近く担ぐ。

##### ②の視点から

子どもたちにとって祭りは身近だが、特に御輿はどの子どもも知っており、御輿を町内会で担いだ経験があったり、テレビ等で見聞きしたりしたことがある。

##### ③の視点から

祭りの運営に関わる人物（参加者）の考えに地域の発展や人々の暮らしへの願いがある。

##### ④の視点から

平安時代に京都で「悪疫退散」を祈って始まった。鹿児島市で、現在のように行われるようになったのは江戸時代元禄の頃からであると言われる。また、鹿児島市の八坂神社が井原西鶴の西鶴折留の作中に「商売繁盛」で取り上げられたことにより、各地方の祇園祭りに「悪疫退散」だけでなく「商売繁盛」も取り上げられるようになったと言われる。

戦時中に中断されたこともあるが、毎年ほぼ同じ時期に行われてきた。さらに、戦後、御輿の担ぎ手が減り、アルバイトを雇って御輿を担ぐ人材

を集めたこともあり、続けていくに当たって苦労していた時期もあった。

### 3 副主題設定の根拠と実践の全体像

#### (1) 副主題設定の根拠

前回の実践報告において、主題に迫るために、

教えたい学習内容の知識構造を明確にし、中核を成す人物を知識構造に位置付けた授業にすることで、自分自身や自分の生活とのかかわりで行えることができるようになるのではないかと仮説設定し取り組んだ。今回も、この考え方を基に、さらに、次の考え方も取り入れて実践を進めることとした。

と仮説設定し取り組んだ。今回も、この考え方を基に、さらに、次の考え方も取り入れて実践を進めることとした。

学習内容を構造化する際、結び付く人物を取り入れ、関連付けて考えさせることがより主題に迫ることになるのではないかと。

根拠として、学習指導要領改訂に伴い、3年生で取り上げられる販売と消費に関する学習内容の取り扱いに、以下のような変化があったことが挙げられる。

内容の(2)のイの「販売」については、商店を取り上げ、販売者の側の工夫を消費者の側の工夫と関連付けて扱うようにすることを示したものである。

ここでは、消費者の信頼を損なうことなく売り上げを高めるための販売者の工夫は、商品の品質や価格などを考えて店や商品を選んで購入している消費者の工夫にも結び付いていることについて指導することが考えられる。

(小学校学習指導要領解説社会編P32)

販売者の工夫と消費者の工夫が結び付いていることについて考えさせることは、社会的事象を多面的に見たり考えたりすることにもつながっていくと考える。

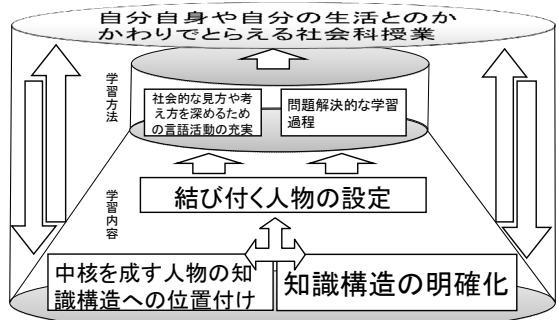
人物の結び付きを明らかにする際には、どのようなことで結び付くのかに注意しなければならない。そこで、上記指導要領解説の記述を基に、中心人物の結び付きを次のような社会的事象のつながりととらえ、このことが関連付けた思考であると考えた。

〇〇者の〇〇な工夫や取組は、△△者の△△な工夫や取組とつながっているから、〇〇者と

△△者は結び付いている。

#### (2) 本実践の全体像

ここでは、学習内容からの視点、学習方法からの視点で取り組み、主題に迫っていくこととする。なお、学習方法については、昨年度設定した視点を生かして取り組むこととする。



#### (3) 中核を成す人物を素材に扱った学習内容

- ・視点A：知識構造の明確化と中核を成す人物の知識構造への位置付け
- ・視点B：結び付く人物の設定

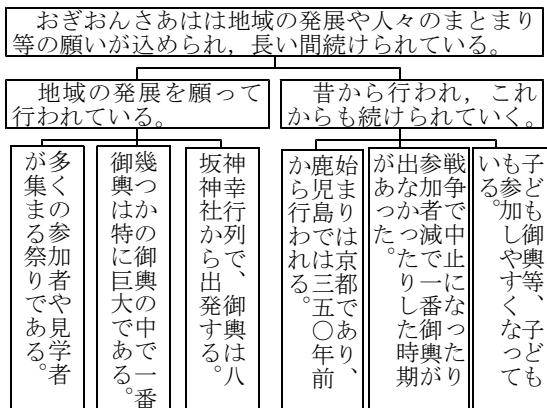
#### (4) 子どもが主体的に学習を進める学習方法

- ・視点C：問題解決的な学習過程
- ・視点D：社会的な見方や考え方を深めるための言語活動の充実

### 4 自分自身や自分の生活とのかかわりで行える社会科授業の考え方

#### (1) 知識構造の明確化と中核を成す人物の知識構造への位置付け【視点A】

単元「わたしたちの市にのこる昔」の知識構造を以下のように設定した。その際、相互の結び付きが明確になるように構造化した。



(2) 結び付く人物の設定【視点B】

単元「わたしたちの市にのこる昔」に表れる人物として以下の人物を設定した。

○ 一番御輿の頭 (参加者)

御輿を担ぐだけでなく、当日までの準備作業等にも1年近くかかわる。祭りの運営を通して、「鹿児島を元気にしたい。」「祭りのよさを知ってほしい。」という願いをもっている。

○ 沿道で見る人々 (見学者)

ここでは、テレビの街頭インタビューに登場する男性、女性、外国人と複数取り上げた。それぞれ「見てると元気が出る。」「楽しい。」「日本らしい。」との発言を残している。

○ 毎年御輿を担ぐ小学生 (参加者)

毎年おぎおんさあに参加し、祭りに参加することで、普段味わえない喜びを感じている。

(3) 問題解決的な学習過程【視点C】

本校で設定している学習過程に、本単元の学習内容を、以下のように取り入れた。

|       |   |
|-------|---|
| つかむ   | 御輿の様子がそれぞれ違っている様子に着目させ、感想や疑問を基に学習問題を設定する。                   |
| 立てる   | 「どんな意味があり、なぜ長く続けられるか。」という学習問題について予想をもち、追究計画を立てる。            |
| 調べる   | 「御輿を担ぐ理由」「長く続けられる理由」という2つの追究の柱を基に調べ話し合い、学習問題を追究する。          |
| 広げとめる | 「今後、年中行事にどのようにかかわるといいか。」についてポスターに「論述」させ、自分の生活とのかかわりで意志決定する。 |

(4) 社会的な見方や考え方を深めるための言語活動の充実【視点D】

本校社会科では、社会的な見方や考え方を深める言語活動を「事実を根拠とした記述、解釈、説明、論述といった言語活動を位置付けることを通して、社会的な見方や考え方をよりよく深めること」ととらえている。

本実践では、「まとめる・広げる」過程で、ポスター作成を設定し、身に付けた概念を再構成して述べたりする「論述」を位置付け、自分自身や自分の生活とのかかわりで意志決定できるようにする。

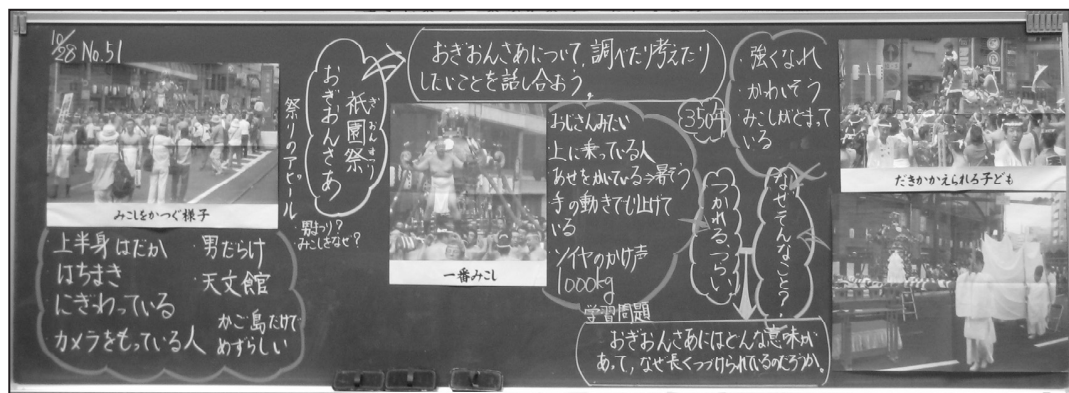
5 自分自身や自分の生活とのかかわりでとらえる社会科授業の実践

(1) 「つかむ」過程【視点C】

ここでは、子どもたちの生活経験の中にある事象から、驚きや疑問を見つけ、学習問題を設定することが、子どもたちの追究意欲を高めることになると考え、御輿を素材として取り上げて展開した。

その際、汗をかきながら御輿を担ぐ様子と御輿の重さから「疲れる、辛い。」という感想を明らかにした。また、御輿を担ぐ人々が赤ちゃんを抱き上げている様子や、御輿が止められている様子から「なぜそのようなことするのか。」という疑問を明らかにした。

これらの感想や疑問を基に、鹿児島でおぎおんさあが続けられてきた年数を提示しながら学習問題を設定した。

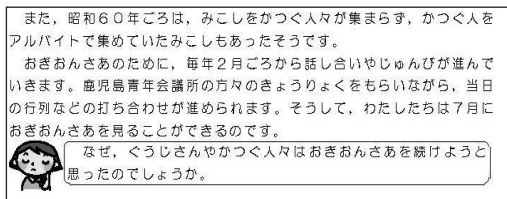
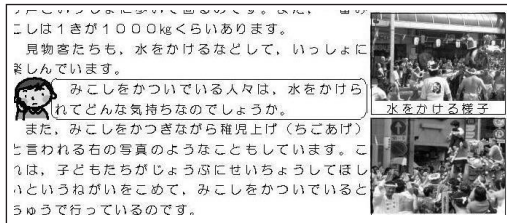


【学習問題を設定する段階の板書】

(2) 調べる過程

① 子どもたちが調べるための教材【視点A】

この過程においては、調べて考えることを重視している。そこで、子どもたちが調べるための教材として、読み物資料を用意した。その際、そこに関わる人物の工夫だけでなく、思いや願いにも着目できるように、問いかけの文章も設定した。以下は読み物資料の一部である。



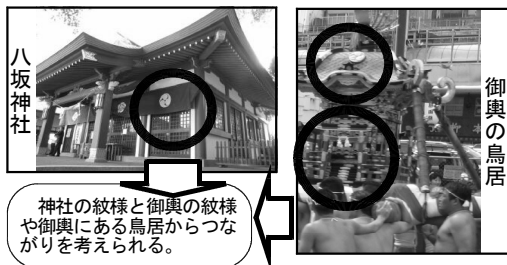
② 調べたことを基に話し合う【視点B・D】

A 御輿を担ぐ理由についての話し合い  
本時のねらいを以下のように設定した。

おぎおんさあが神幸行列であることと、地域の発展を願って行われていることをとらえさせる。

まず、一番御輿に関係する数字のみを板書し、単位を予想させた。この数字から「暑い。重い。辛い。大変。」といった感想を表出させながら、「なぜ、2kmも重い御輿を担ぐのだろうか。」というめあてを設定した。

次に、御輿や一番御輿の頭に注目させて、これまでに調べてきたことを振り返らせた。そして、



【神社と御輿のつながり】

御輿と神社の三つ巴の紋様に着目させ、御輿が神様の乗り物であることと神社につながりがあることをとらえさせた。



【三つ巴の疑問を発言する様子】

さらに、「なぜ、神様のために人々は頑張っているのだろうか。」と発問した際の「参加した人(参加者・見学者)に聞かないと私たちには分からない。」という子どもの発言を生かして、参加者である一番御輿の頭の話と見学者の街頭インタビューを収めたVTRを視聴させた。



こんなに素晴らしい行事があることを子どもの頃は知らなかった。鹿児島の人々や鹿児島を元気にしたい。



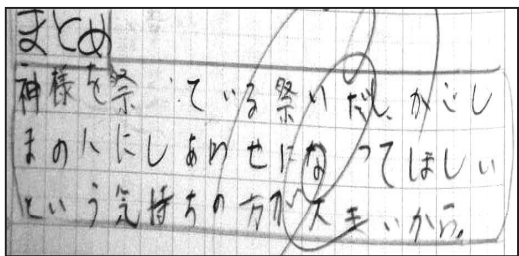
元気が出る。もっと若ければ参加したい。

頭の人や地域を元気にしたいという願いとインタビューを受ける人の元気になるという思いは結び付く。

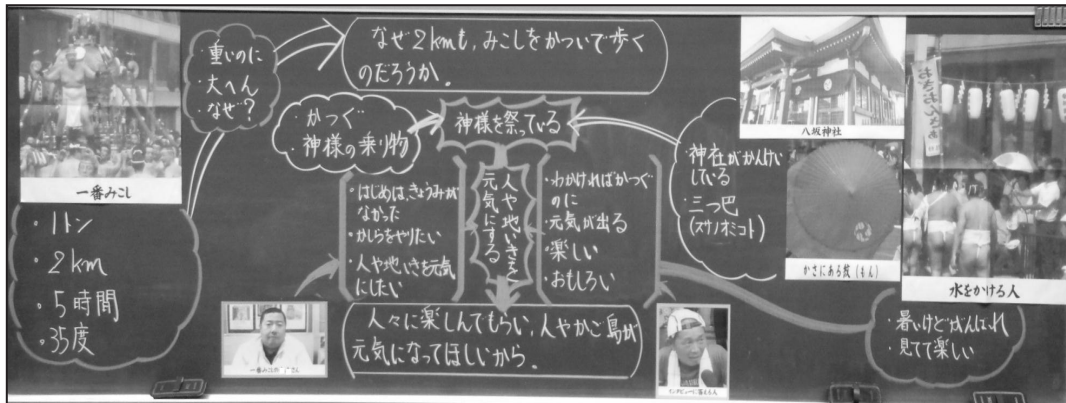
【参加者・見学者のインタビュー内容の結び付き】

まず、一番御輿の頭の話から、「神様のためではなく、人や地域を元気にしたいからである。」という思いに着目させた。次に、見学者の街頭インタビューを収めたVTRから「元気が出る。面白い。楽しい。」という思いに着目させた。

そして、参加者の思いと見学者の思いが「元気になる。」ということで結び付いていることをとらえさせたところ、下のように本時のまとめを「説明」する姿が見られた。



【見学者の思いを基にした説明】



【ア 御輿を担ぐ理由について話し合う段階の板書】

イ 長く続けられる理由についての話し合い  
本時のねらいを以下のように設定した。

これまで続けられながら中止になることもあったが、これからも続けていきたい願いがあって行われている。

ここでは、まず明治40年に行われたおぎおんさあの新聞記事を提示し、昔から続けられてきたという実感をもたせながら、なぜ続けられてきたのかというめあてを設定した。

次に、読み物資料の中にあるおぎおんさあの変遷を示した資料から、1200年前に京都で始まったことや鹿児島では350年前から現在の形で行われるようになったことに気付かせた。そして、時間の長さを実感をもたせるために、小学3年生の人生の長さに対してどれくらいの長さなのかを以下のように可視化できるようにした。



【時間の長さを可視化した帯】

さらに、昭和以降のおぎおんさあの変遷を示した年表を提示し、これまでおぎおんさあの花形的存在だった一番御輿がなくなっている時期に着目させた。そのことと、読み物資料の「人手が足らなくてア



【アルバイトを頼んでいた頃を読み物資料から見出す】

アルバイトを頼んで担ぎ手を集めていた。」という記述を関連付けながら「大変な頃だったが、続け

ていこうとしたのである。」と類推する姿が見られた。

また、「なぜ続けていくことができるのだろうか。」と発問しながら、毎年参加する小学生の話からこれからも続けていくよさがあることをとらえさせた。そして、これまで【御輿を担ぐ小学生】で続けてこられたことと、これからも続けられることを関連付けて、めあてに対してまとめた。



【御輿を担ぐ小学生】

|              |                |                |
|--------------|----------------|----------------|
| 昭和以降のおぎおんさあ  | おぎおんさあがなくなったこと | おぎおんさあがなくなったこと |
| 昭和50年(1975年) | おぎおんさあがなくなったこと | おぎおんさあがなくなったこと |
| 昭和55年(1980年) | おぎおんさあがなくなったこと | おぎおんさあがなくなったこと |
| 昭和60年(1985年) | おぎおんさあがなくなったこと | おぎおんさあがなくなったこと |
| 昭和65年(1990年) | おぎおんさあがなくなったこと | おぎおんさあがなくなったこと |
| 昭和70年(1995年) | おぎおんさあがなくなったこと | おぎおんさあがなくなったこと |
| 昭和75年(2000年) | おぎおんさあがなくなったこと | おぎおんさあがなくなったこと |
| 昭和80年(2005年) | おぎおんさあがなくなったこと | おぎおんさあがなくなったこと |
| 昭和85年(2010年) | おぎおんさあがなくなったこと | おぎおんさあがなくなったこと |
| 昭和90年(2015年) | おぎおんさあがなくなったこと | おぎおんさあがなくなったこと |
| 平成0年(2016年)  | おぎおんさあがなくなったこと | おぎおんさあがなくなったこと |
| 平成5年(2021年)  | おぎおんさあがなくなったこと | おぎおんさあがなくなったこと |

【昭和以降のおぎおんさあ】



【御輿を担ぐ小学生】

これまで、中断したこともあったが続けられてきた。心一つにしたり、普段会えない人に会えたりするから、これからも続けたい。

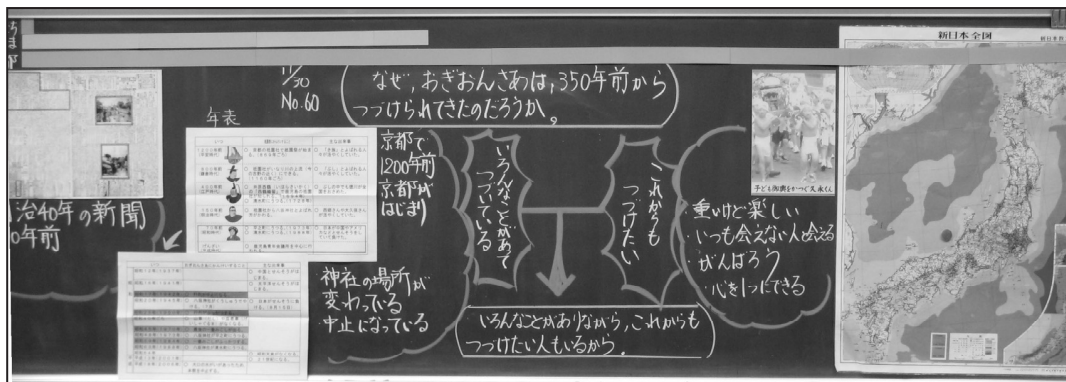
これまで続けられたことは、これからも続けたいという人々の願いがあるからだということにつながる。

【これまでとこれからのつながり】

それから、「今後年中行事にどのように関わっていきたいか。」について「説明」させたところ、以下のような姿が表出された。

私はこれから、DVDなどを見て年中行事にさんかしてみたいと思いました。また、さんかできなくても見に行きたいと思いました。理由は、私は鹿児島が大好きです。なので、がごしまのためにした。あと、昔の人のゆうきをつなげたいと思う。

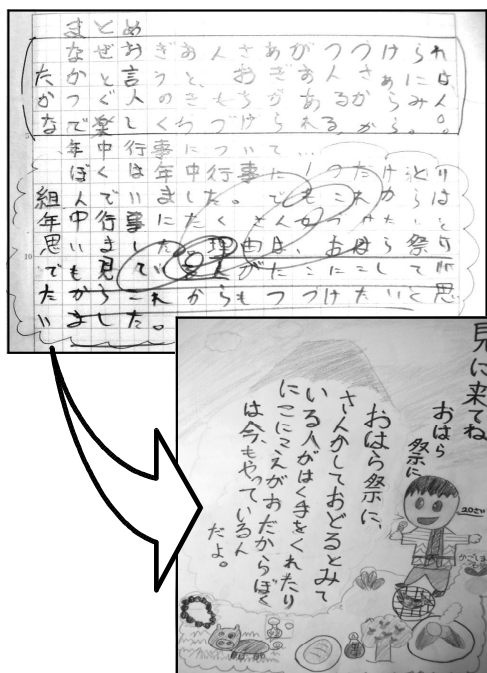
【小学生の話を基に考えた説明】



【イ 長く続けられる理由について話し合う段階の板書】

(3) 「まとめる・広げる」過程【視点B・D】

前時でまとめたことを生かして、今後年中行事とどのようにかかわっていきたいかを次のようにポスターにまとめ、「論述」させた。



【前時で習得したことを活用して作成したポスター】

中心人物同士の結び付きや事象同士の関連を意識した子どもたちのポスターが見られた。右は参加者・見学者の視点から自分とのかかわりや地域に対する自分自身の愛情を見つめる姿である。以下は、現在・未来の視点から自分とのかかわりを見つめる姿である。



6 成果及び今後の課題

(1) 成果

中心人物同士の結び付きや事象同士の関連を明確に設定したことで、自分の生活とのかかわりを見つめる際の視点として生かす姿が見られた。

(2) 課題

中心人物同士の結び付きと、関連付けた思考との相互関係をより明確にする必要がある。

7 終わりに

学習内容の構造については、小学校社会科の学習を展開する際によく聞く言葉である。そこで、結び付く人物同士を内容として取り扱い、関連付けて考えられるようにしたら、学習内容の構造をつくる際のヒントになるのではないかと考え、実践したところである。

学習内容の構造をつくる際のヒントはまだ他にもありそうである。実践家として、子どもの思考の流れに沿い、且つ、追究意欲を高められるような内容を探していきたいと思う。